

面白モノ その2

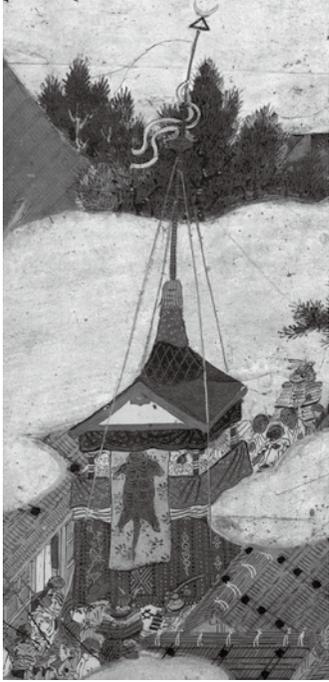
宵祭りの品定め

出雲市平田天満宮の夏祭りの宵、「一式飾」を見に行った。ハレの日、ハレの場を飾る、造形に趣向を凝らしたつくりものの数々。宵祭りのあと、囃らずも飲み屋で、その作り手たちによる品評会を耳にした。つくりものにこめられた地元の人のおもいは……。

つくりものの系譜

造形に殊更に趣向が凝らされたつくりものと、祭りや年中行事といったハレの場との結び付きには歴史的な系譜が存在する。日本では古代から中世にかけて、人びとに厄災をもたらす神霊「御霊」に対する祭りや年中行事が盛んになった。ここでは御霊の慰撫鎮送のために、衣装や被り物から踊りや歌謡まであらゆる局面で派手で奇抜な趣向を凝らすこと、即ち「風流」が重要な眼目とされ、器物の造形に趣向を凝らす「風流造り物」もあらわれた。

「上杉本洛中洛外図屏風」の函谷鉾（かんこぼこ）。舶来のタペストリーと虎皮の風流が見られる。米沢市（上杉博物館）蔵



その後、風流は大勢の見物が集まる都市の祭りにおいて一層進展し、さまざまな趣向を凝らす大規模な祭りもあらわれた。



細工見世物「とんだ霊宝ほうぼう大師ご開帳」(部分)。魚のホウボウの乾物を弘法大師に見立てた開帳を伝える錦絵。国立歴史民俗博物館蔵

一方、近世後期

から末期、江戸や大坂などの都市の盛り場や祭りや寺院の開帳において、乾物で作った仏像や、籠を組み上げた巨大な像、生身の人間以上に生々しい人形といった、造形に機智を尽くした「細工見世物」の興行が人気を博すようになった。各地のつくりものは、こうした風流と細工見世物の系譜を受けてあらわれたとされる。

確かに各地のつくりものは、毎年新奇な趣向を凝らし、意外な素材でさまざまな造形を作り上げている。しかし、実際につくりものの現場に足を運んでみると、これらの系譜で片付けるだけでは不十分に思えてきたのである。

平田の「一式飾」競技大会

島根県出雲市平田の「一式飾」を初めて見に行ったときのことである。平田の一式飾は陶磁器や台所用具など同類の器物一式で作るつくりもので、寛政五年（一七九三）、表具師の桔梗屋十兵衛が茶道具で大黒天像を作ったのが始まりとされ、七月の平田天満宮の祭りと前日の宵祭りに一式飾が町内各地の飾り宿に飾られる。宵祭りの日に平田に着いたわたしは、宿に荷物を置くくと食事を取りに町に出た。一式飾が飾られた方々の飾り宿を見ながら食

事の店を探したが、時間が遅く飲み屋しか開いていない。適当に店を選んで暖簾をくぐり食事を取っていると、常連らしい年配の男性たちが店に入ってきた。既に酒が入って上機嫌で、注文もそこそこ何やら声高に話し始めた。聞かせてくる彼らの話によると、彼らは一式飾競技大会の表彰式の後らしかつた。平田では毎年一式飾競技大会が催され、宵祭りの日に審査員の投票によって特選・準特選・努力賞・アイデア賞が決まり、表彰式がおこなわれる。この年の表彰式は大いに盛り上がったらしく、その興奮が未だ冷めやらずといった様子であった。

というのも、特選が一度目の投票では同数で、決選投票で僅差でようやく決まったからである。特選に選ばれたのは、毎年地元祭りの題材にした巧みな一式飾りで定評がある町内であった。一方、惜敗した町内も毎年見事な一式飾を作っていて、この年も特選の町内にひけを取らない出来映えであった。にもかかわらず敗れたのは、彼らによれば運が悪かったという。その町の一式飾の「横綱の土俵入り」は、元々綱取りが期待される地元出身力士を題材にしたものであった。しかし、折悪しく角界をゆるがした

不祥事との関係が判明して名前を出せなくなった。それがなかったら特選が取れたはずと彼らの意見は一致していた。

地元ならではの盛り上がり

決選投票の話が一段落すると、話はほかの一式飾に移った。競技会の結果は全体的には彼らにも概ね納得のいくものであったが、細かい点ではいろいろ思うところがあるらしい。曰く、ある努力賞の町内はいかにがんばり不足に映ったらしく、「努力賞は本当に努力しな

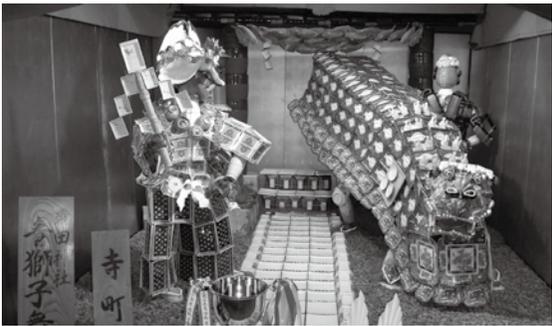
平田一式飾 陶器一式「横綱の土俵入り」(西町)



いと駄目だね」。同じ努力賞でも前年より大分進歩が見られた町内は、「今年は大分頑張ったよ」。この年封切られた地元私鉄が舞台の映画に因んで雑誌の表紙やカラーページで電車を作った町内に対しては、題材はいいが器物をそのまま用いる一式飾としては、「雑誌を破いちや駄目だな」。コミックがテレビや映画化されて人気の音楽ドラマを題材にしたものは、そのドラマを知らない彼らにはまったく理解不能で、「○○(ドラマ名)って一体何なんだ?」等々。彼らの話は酔った勢いも手伝い一層熱が籠もり、その後も延々と続いたのである。

この夜の彼らは、決選投票となった一式飾の出来映えから努力賞への苦言までいいも悪いもすべて嬉々として語り、心底楽しそうなのが印象的であった。ここでは、わたしのようないち飾を初めて見る余所者には思いもよらないさまざまな点が問題とされていたが、注目されたのは、余所者にも理解が容易な風流や細工見世物の系譜に繋がる造形面よりも、題材の地域性や時宜性、一式飾の範疇か否かといった、地元の人びとでなければわからない内容が多くを占めていたことである。

平田の一式飾の面白さは、毎年祭りですれを作り、見て、批評するなかで培われ、体得され、共有されてきた、地元の人びとならではの想いや感覚に支えられてこそ成り立つ。この夜の彼らの一式飾の品定めからそんなことを強く感じるとともに、そんなふうになんか豊かに一式飾に接することができる彼らに羨望を覚えるつ店を後にしたのであった。



平田一式飾 陶器一式「持田神社 青獅子舞」(寺町)

笹原亮二 民博研究戦略センター